

華やかな魔獣

平岩弓枝



華やかな魔獣 平岩弓枝



華やかな魔獣

九五〇円

昭和五十三年二月二十五日発行

著作者 平岩弓枝
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
本社 東京都新宿区西大久保三二六
出張所 東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六二二七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0093-782131-5170

無検印承認

華
や
かな
魔
獣

〒550 大阪市西区江戸堀2-3-4
古金一郎方

電話 06-441-4 3 9 7

目次

アルファ・ロメオ	二五
バラの咲く家	二
疑惑	元
ベルリン・オペラ	元
早苗の手紙	毛
木枯し	翌
消える	翌
あの男	三
ホテルにて	六
冬のサボテン	七
奇妙な契約	八
姿なき口笛	九
日記の秘密	壹
挑戦状	一〇
夜空の星	二〇
畏	二二

紅い海	二五
爪痕	二三
婚約指輪	二二
第二の犠牲	二五
消えた文字	二五
魔獣の正体	二七
白い手袋	二九
老牧師	二七
第三の犠牲	二四
復讐	二三
二人の刑事	二五
闇の中の虹	二六
真犯人	二六
ウエディング・マーチ	二九
夕映えのボン・デ・アスカル	三五

アルファ・ロメオ

一

雨もよいの暗い午後であった。

国道一号线を疾走して来た真紅のアルファ・ロメオ・スプリントGT・ペローチェが、大磯を出はずれた所で不意に、北へ道をそれた。

狭い、でこぼこした田舎道に、不似合いな赤いスポーツカーに、ぼんやりみとれていた郵便配達の男は、目の前にその車が止ったので、思わず足を止めた。

運転していた男が、窓から顔をのぞかせた。

「このあたりに、飛行場があった筈ですが、ご存知ありませんか」

おだやかな、ていねいな言葉づかいなのに、郵便配達が思わず息をのんだのは、その男の左頬にくっきりと長い一本の傷痕があったためである。

曇り陽の中で、男の傷のある顔は、凄惨に見えた。

「飛行場なら……そこを戻って……ずっと行くと洋品店

があるから、そのむかいの道を右へ上って……」

どもりながら、郵便配達は要領の悪い教え方をした。

「有難う……」

僅かな空地を巧みなハンドルさばきで方向を変えると、イタリアのスポーツカーは、あつという間に郵便配達の視界から消えた。

二度目にアルファ・ロメオが止ったのは、さつま芋畑のわきの道であった。

運転席から身をのり出すように、右側の窓から右の顔をのぞかせて、畑で草むしりをしていた若い娘とその母親に声をかけた。

「この道を行くと、飛行場へ出られますか」

「飛行場……?」

母親のほうが首をかしげた。

「そんなもの……この辺にあるかねえ……」

娘をふりむいた。

「昔……戦争中、海軍の基地になっていたんですが……」

「さあ……私たちは最近、この土地へ来たもんで……」

「お母さん……」

背後で、スポーツカーの男の顔に視線を針づけにしていた娘が、少し赤くなつて口ごもりながら言った。

「ねえ……あのことじゃない……溝上重工の……工場中の……ほら、長い滑走路みたいのがあつて……夏に海

上バトロールの小さな飛行機がとび立ったりしたじゃないの……」

「そうそう……私ア、飛行場っていうから、羽田のようなのかと思っちゃって……そういやア、飛行機がとぶんだから、あんな所だつて飛行場っていうのかも知れないね」

母親は自分のそそっかしさを笑いながら、その方角を指した。

畑と雑草の丈長くのびた原の道の、泥の道を赤い車が去ってから、娘が嘆息とともにつぶやいた。

「お母さん……今の人、すごいハンサムじゃないの」

この母娘がみたのは、ひきしまつて、男っぽい右からの男の顔である。夕暮が傷のある左側を気づかせなかったものだ。

三番目のアルファ・ロメオの目撃者は、溝上重工の大磯工場の工員である井上勇次だった。

ちょうど、五時の終業のサイレンがなつて、帰り仕度をしなが、ロッカールームの窓から、なにげなく滑走路のほうを眺めた。

滑走路といつても、普段はバスやタクシーも走るし、工場へ通ってくる人々の通行する草むらの中に巾広く、長く続いている舗装の路だった。

舗装はひどくいたんでいるし、小石がごろごろして

る。これで、よく飛行機がとべると思われるような道の状態だし、両側の広いすきの原の向うに工場の建物があるだけだから、知らない人には、これが滑走路とは、まず気づかれないような荒れ方であった。

すすきの原にまっ赤なスポーツカーが止っている。運転席には人はいなかった。

人間の背よりも長く、白い穂の並んだすすきのかたわらに、その外車は狸が化けたように不釣り合いであった。

「おい、井上……今夜、岡本ンとこで麻雀やるんだが、来ないか……一人足りねえんだよ」

同僚の桜井が誘ったが、勇次が返事をする前に、別の同僚が笑った。

「駄目、駄目、井上が来るもんか。お袋のオッパイ飲んで甘たれてる奴だ……」

「親一人子一人はつらいね、ジャン一つき合えねえか……」

「麻雀どころか、一人息子に母親のコブつきじゃ、嫁のなり手がないそうだ……」

「母親っ子に、娘をやるな、か……」

「パパつき、カーなしじゃな」
がやがやと勝手な同僚の軽口も、馴れてしまつて、勇次には腹も立たない。

ロッカールームを出たのは勇次が最後だった。

帰り足の早い工場の夕暮は、あつという間に人の気配がなくなつて、馬鹿でっかい建物が、氷山のようにしずまりかえっている。

建物の間を抜けて、出口のほうへ歩いた。工場は周囲をざつと柵でかこい、出口には、門があつて、その横に守衛室がある。

近づくと、守衛室の中から長身のみなれない男が出て行くのが見えた。

灰色の工場の建物と、暮れなずむすき原の間を、鮮やかなライト・ブルーの男のシャツが遠去かつて行くのが、鮮やかであつた。

守衛室の前を通ると、守衛の森嘉吉が、ぬつと突立っている。

「お疲れさん……」

勇次が声をかけると、森は夢からさめたような表情になつた。

エンジンの音が聞えて、勇次はそつちを見た。

「すごいスポーツカーだね……今、ここにいた人の車かい……」

森は返事をしなかつた。

「森さんの知ってる人……?」

「いや……なぜ……?」

ひどく、あわてた応答だつた。

「森さんと話してみたいだつたからさ」

「話すには話したが……ききに來たんだよ……ここが、昔、海軍の基地だつた飛行場かと……」

「海軍の基地……」

「井上君のような戦後に生れた人間は、無論、知らんだろうがね……ここからも随分、帰らぬ戦闘機がとんだものさ」

森は、ちらと感慨深げな表情をした。

「戦後は払下げられて、民間の航空会社が持つていたんだが、経営がおもわしくなくなつて、とうとう売りに出た……それを、うちの会社がこのあたりの土地ぐるみ買いとつて、工場を建てたんだが、滑走路周辺はそのまま残して、夏の間だけ、水上バトロールの基地に貸しているわけさ」

そのことは、勇次もきいていた。

「あの人……ここが工場になつてしまつてること、知らなかつたんだろうか」

「そうらしい。溝上重工が買ったと話したら、おどろいていたよ」

「海軍の基地だつたのなら、この滑走路なんか、ずいぶん立派だつたんだろうね」

勇次は小石と土くれに荒れ果てた滑走路を眺めた。路の真中に柵がしてあつて、滑走路は、そこで中断された

形になっている。

夏、海上バトロールの飛行機がとび立つときは柵をはずして、滑走路として使えるようにしていた。

「さっきの人、もしかすると、昔の海軍にいたんじゃないかな。この基地から戦闘機でとび立って行った……戦争の生き残りかなんかで……それで、なつかしがって見に来たんじゃないのかい」

「そんな話はしなかったがね……第一、年齢からいっても、ちっと若すぎるようだし……」

森は勇次の思いつきを否定した。

「それにしても、おかしいね、戦後二十一年もたっているのに……今頃、海軍の基地のあとを訪ねてくるなんて……」

勇次はそこで話を打切った。帰ろうとして、ふと見ると、森はポケットから煙草を出して、マッチで火をつけようとしている。指先がぶるぶるふるえて、なかなか火がつかなかった。勇次の視線を避けるように背をむけた後姿が、ひどく落着かない。

変だな、とは思いつながら、それ以上には気にもしない

で、

「お疲れさま……」

勇次はいつもの挨拶をして門を出た。
町へ出るバスを待っていると、すすきの原をへだてた

高台にある修道院の鐘が澄んだひびきを伝えて来た。

工場から町へむかうバスは、でこぼこ道を乱暴に走って行く。

このあたりは溝上重工の工場の他は草原と芋畑で、人家は殆んど見当らない。

バスは畑と草原の間を走って、やがて修道院下で止った。

バス道に修道院の門があり、門を入ると石段が続いて、その上の丘に教会のような建物が見えている。讚美歌がきこえていた。

修道院の庭を黒い服をまとった修道女が歩いている。並んで歩いているのは和服姿の女性だった。

白っぽい着物に青磁色の帯がきわだって、勇次の目を惹いた。修道女はその若い女性を送って来たものらしかった。

バスに乗るのかとみていると、その和服の女は修道女に別れの挨拶をして門のわきの空地に待たせてあったハイヤーに乗った。

ひどく沈み込んだ、うつむきがちの表情が夕もやの中で、勇次に白い木蓮の花を連想させた。

ハイヤーはバスを追い越して走り去った。自分よりはるかに年上らしい女の、青磁色の帯が、妙に勇次の心に残った。

路地をまがるとさんまを焼くにおいがしていた。

古ぼけたアパートの階段をぎしぎしならして二階の部屋の前へ立つと、ドアに鍵がしまっている。

化粧品のセールスマンをしている母親が今日は横浜まで行くので遅くなると言ったのを勇次は思い出した。

牛乳受けの箱のかげにかくしてある鍵で部屋へ入り、買い物籠をとって、また、出た。

母一人子一人の生活が小学校の頃から続いている。いつのまにか身についた世帯くささだった。

階段を下りようとすると、息をきらしてかけ上って来た若い娘が、

「あら……勇次さん……」

「どうしたんだ……早苗ちゃん……」

早苗は肩で息をしていた。いつも微笑を消さない頬が、こわばっている。

「どうしたのさ……」

もう一度、きいたが、早苗は無理に作ったような笑いを浮べただけで、そのまま、自分の部屋のはうへ走って行った。

さんまを買って来て、夕食の仕度をする、勇次は机

の上の航空雑誌をひろげた。乏しいこづかいの中から、毎月、これだけは欠かさず買っている。

飛行機乗りになりたいというのが、勇次の少年の日からの夢であった。あの翼のある大きな物体をあやつって、大空を自由に出来たら……しかし、中学校を卒業しただけですぐに溝上重工の工員として働きはじめた今では、飛行機乗りになる夢は、もはや夢のまた、夢でしかなくなっていた。

それでも、勇次は休日に羽田へ出かけて、一日中、ひっきりなしに離陸、着陸するジェット機を眺めていたり、こづかいをためて飛行機のプラモデルを作ったりすることは止めなかった。

十時をすぎて、母の君子が帰って来た。

「今日は骨折り損のくたびれもうけよ。遠くまで行った割合に、売り上げはさっぱり……こんなことだと、今月も早苗ちゃんに負けちまうわね」

おそい夕食を勇次と食べながら、君子は疲れた顔で笑った。

「早苗ちゃん、今日、何時頃に帰った？」

「そうだな……あれは六時すぎだったかな」

勇次は階段で早苗とすれちがった時のことを思い出した。

「なんだか、息を切らしてかけ上って来てさ。俺が声を

かけても、返事もしないんだよ」

「急ぎの用事でもあったんでしょ」

「そうかな……」

根上早苗は、勇次と同じアパートに一人きりで暮している。両親はすでに病死していて、二人あったという兄も、長兄は戦争中、特攻隊で戦死し、次兄は鉄道へつとめていて事故死するという不運な娘だった。

四年ほど前、それまでつとめていた会社がつぶれて、途方にくれているのを、世話好きの勇次の母が、自分の働いている化粧品会社へ紹介し、以来、セールスをしている。

少々、さびしい感じはあるが、黒^{くろ}腫^{しゅ}がちの愛くるしい美貌の上に、よく気のつく、しっかり者でセールスに歩いても評判がよく、昨年あたりからは毎月、売上げはトップという成績をあげていて、勇次の母は自分のことのように自慢にしていた。

年齢は勇次より二歳年上で二十三、小柄のせい、まだハイティーンにしかみえない。

「そうだね。横浜で芋ようかん買って来たんだっけ……早苗ちゃん、まだ起きてるだろう……これ、一つ持ってっておあげよ」

君子が皿へのせた芋の菓子を持って、勇次は向い隣の、早苗の部屋のドアをノックした。返事はない。鍵もかか

っていた。

「寝ちゃったらしいよ……ノックしても返事がないんだ」

帰って来て、勇次は告げた。

翌朝は雨であった。

勇次が工場へ出かけて行くとき、共同炊事場で洗いものをしている早苗の後姿がみえた。

「お早よう……」

わざわざ遠まわりして声をかけると、

「お早よう」

早苗は白いエプロンで手を拭きながら微笑をかえた。心なしか、寝不足気味の眼をしている。

「昨夜、ずいぶん早くねちまったんだね。十時頃、芋ようかん届けに行ったら……電気が消えていたよ」

「そう……」

ちよつとためらって、

「私、出かけてたのよ……」

「へえ、だって夕方、帰って来てたじゃないか」

「あれから、また……用事を思い出したものだから……」

「ひどく、おそかったじゃないか……」

「向島の伯父さんのところまで行ったものだから……」

「向島……」

たった一軒きりの早苗の親類が、東京の向島で芸者屋

をしているという話は、勇次も知っていた。早苗の父の兄に当る家だが、どういうわけか、早苗はあまり語りがらないし、めったに行き来もしていない。

そんな所へなぜ、日が暮れてから出かけたのかと、口許まで出かかって、勇次は止めた。

早苗の表情が、その話題に触れられたくないことをはつきりしめしていたからである。

「それじゃ、帰りは終電車になったろう」

「ええ、小田原行き最終……」

とすると、早苗がアパートへ帰ったのは、午前一時をすぎたことになる。

「ぶっそうだぜ。若い娘がそんな時刻に……」

年上のような言い方をして、勇次は早苗に背をむけた。雨の中を歩き出して、ふりかえると、洗い物をかかえてアパートの階段を上って行く早苗の姿がひどく小さく見えた。

溝上重工の大磯工場の守衛、森嘉吉が死体となって発見されたのは、その朝であった。

バラの咲く家

一

その朝の電話を受けたのは、百瀬家の一人娘の螢子だつた。

「お母さま、溝上のおじいさまから、お電話なのよ。お父さまをおっしゃるんだけれど……留守と申し上げたら、行く先は、って……なんだか、急な御用のようよ」

螢子は、秋の朝のさわやかな太陽のさし込むベランダから、庭で秋のバラをつんでいる母の久仁子へ声をかけた。

「そう……今、行きます……」

久仁子は花ばさみとバラの籠を、螢子へ手度してベランダへ上った。

かすかな衣ずれと白い足袋が廊下を急いで行くのを見送って、螢子はまだ露にぬれているバラの香に顔を近づけた。

バラは、母の好きな花であった。螢子が物心つく時、すでに庭のバラ畑は大輪のビースや、真紅、白、ピンクなど四季それぞれに花を咲かせていた。

花のように、美しく、若い母であった。

久仁子といっしょに歩くと、螢子はよく妹かとまちがえられた。螢子の学校のPTAに出席するたびに、久仁子はその若さと美しさで、螢子のクラスメートの話題になった。

そんな母が、螢子は自慢だった。

「私を産んだのが二十歳の時だから、もう三十六になっているのよ」

友人に説明しながら、とても三十六歳にはみられない、母のろうたけた、横顔を想う。

古風な、どこか憂いのあるような美貌の母であった。和服がよく似合う。好みも日本的で、洋装はめったになかった。

その和服も年齢より、ひかえめで地味好きなのに、それがかえって着ている母を若く、ひきたたせてしまう。

「螢子のお母さまって、まるで源氏物語に出てくる藤壺の女御みたいね。お美しくて、なんとなくはかなげで、もし、男だったら、ぐっと抱きしめて守ってやりたくなるような、そういう女の魅力を持ってらっしゃるわね」と、クラスメートの品川久子から言われたことを、螢

子は思い出した。

実際、娘の螢子がみても、久仁子には、なにか保護してやらなければすまないような、寂しさというか、ほの暗いムードがある。

家庭でも、ひっそりとももの静かな人であった。夫である、螢子の父に対しても、いつも受身で言葉少ない。

両親の言い争いをしている姿を、螢子は一度もみたことがなかった。

といって、夫婦仲が特別によいというのでもなかった。むしろ、両親の夫婦仲に冷たいすさまじい風が通っているのを螢子は感じている。

父の秀彦は、土曜日の夜はこの田園調布の自宅へは帰らない習慣が、もう五年も前から続いている。

れっきとした父の愛人の家が目黒にあって、土、日はそっちで暮すのだということを、螢子は、父の母である祖母からきいた。

「久仁子さんも困った人ね。秀彦がいつまでたっても女と縁が切れないのは、久仁子さんがしつかりなさらないからなのよ」

と、そんなふうに祖母は孫の螢子の前で母を非難した。嫁いで来て十七年、螢子という娘まで産みながら、どういうわけか、久仁子は百瀬家の中で孤独な存在だった。螢子がバラの籠を持って、居間へ戻ってくると、母の

久仁子はまだ電話中だった。

「どうしても、今すぐに、秀彦へ連絡しなければいけないの……？」

哀願するような母の調子で、螢子はあらためて今朝が日曜日であることに気がついた。

父の秀彦は目黒の女の家に行っている……。

「わかりました。そう致します……」

久仁子の白い指が力なく受話器をおき、別にまた、とりあげて、新しくダイヤルをまわしているのを、螢子は居間からみつめていた。

「もしもし、相馬さんですか……朝早くからごめんない。主人にちょっと急ぎの用事が出来てしまったものから……」

久仁子は、秘書の相馬千春へ電話をし、彼女から、夫への連絡を頼んでいるのだ。

「すみませんが、溝上の家のほうへ、なるべく早く電話をするように、伝えて下さいましな。いつも、こんなおたのみばかりで……悪いのですけれど……ええ、お願いします」

電話を切って居間へ入って来た久仁子は、そこで自分をみつめている螢子の視線にぶつかると、悪いことでもしたように、ふっと目を伏せた。

「お母さま、どうして目黒の家へ直接、お電話なさらないの。あちらがどんなであろうと、お母さまは、れっきとした百瀬秀彦の妻じゃありませんか」

夫の愛人の家にまで遠慮して、おどおどしているような母がみじめで、つい、螢子は強い声になっていた。

「螢子さん……」

かすかに目をあげた母が、急にうろたえた表情になった。螢子がふりむくと、いつの間に入ってきたのか、祖母のきぬ子が立っている。

庭をへだてた隣家が、秀彦の両親である百瀬俊三、きぬ子夫婦の邸になっていた。

「秀彦に急な用事って、なんなの、久仁子さん……」

保守系の国会議員である百瀬俊三の妻は、すっかり白くなった髪の一部を技巧的に紫に染め、朝から銀色のマニキュアを光らせていた。

「はい……あの……溝上の父から電話がございまして……」

久仁子の細いうなじは折れそうに深くうなだれる。

「おや、そう……今朝は家へも電話がありましたよ」

「お舅さまのほうにも……溝上から……」

「ええ、なんですかね。溝上重工の大機だかの工場で、守衛が殺されたんですとさ」

「守衛が殺され……」

思わず螢子が声をあげた。

「おや、まだ知らないの。新聞をごらん下さい。ちゃんと出てますよ」

きぬ子は螢子へまで、そんな言い方をした。

祖母が孫にしめすような甘い感情を、この祖母は、螢子が赤ん坊の時から、まるつきり持っていないふうであった。

「嫌だわね。工場で殺人事件が起るなんて縁起でもない……」

それが久仁子の責任でもあるかのように舌うちして、

「久仁子さん……いつもいうことだけれど、あなただって昨日今日に百瀬家へ嫁に来たわけでもないんでしよう。自分の夫への電話を、秘書にかけさせるようじゃ、困ってしまいますわね」

「申しわけございません……」

「秀彦は、今でこそお父さまの秘書の立場ですけれど、近い将来、百瀬俊三のあとを継いで一流の政治家になる男です。未来の代議士夫人がそんなことでは、どうにもなりませんことよ」

例によって例のごとき皮肉である。

「おばあさま、おばあさまは百瀬秀彦のお母さまなんでしょう。だったら、お母さまを責める前に、どうしてご自分の息子の不しだらをおとがめにならないんですの」
たまりかねて、螢子はい、口を出した。

「秀彦は、もう一人前の男です。妻も子もある男に、今更、母親がとやかくいうものではありませんのよ」

「そうでしょうか。いくつになっても息子は息子、母親には息子が間違った道を歩いたら、叱責する義務がおありじゃありませんか」

「螢子……おばあさまに口答えをなさるんですか……久仁子さん、あなたのおしつけがなくなっていませんよ」

「びしゃりときめつけて、きぬ子はふとった体をもて余すように、居間から去った。」

二

朝刊を手にして、螢子は二階の自分の部屋へとじこもった。

社会欄をひらくと、片すみに、

「自動車工場の守衛、殺さる」

というみだしで記事があった。

五日（土）午前九時すぎ、溝上重工、大磯工場の守衛、森嘉吉さん（51）が、工場近くの草むらで絞殺死体となって発見された。森さんは前夜の宿直で、朝になって姿が見えないのに出勤した工員たちが不審に思い、探している中に、すすきをとりに来た近所の主婦が、現場から三メートルばかりの地点にあ